

探究的な学びを発展させる指導のあり方

【研究代表者】谷尻 治（和歌山大学教職大学院）

【共同研究者】貴志年秀（和歌山大学教職大学院）

中山和幸（和歌山大学教育学部附属小学校）

中山義之（和歌山市立加太小学校）

早崎大輔、前田峻、中山雄一郎（和歌山市立有功東小学校）

赤松広志、藪隆政、細田和希（和歌山市立雑賀小学校）

梶本久子、山崎亮子、谷口聖人（和歌山市立楠見小学校）

1. 今年度の共同研究について

『探究的な学びを発展させる指導のあり方』

「総合的な学習の時間」の共同研究4年目にあたる今年度は、上記のテーマでこれまでの研究を一層発展させるべくスタートした。今年度から、和歌山市小学校総合研究会会長の梶本久子校長先生（和歌山市立楠見小学校）をメンバーに迎え、楠見小の2名も加わって総勢13名となった、今年度もコロナウイルス感染症対策により様々な規制は続いた。しかし、公開授業研究会の開催が一部可能となり、全員が一同に会するのは難しいものの、公的な研究会を活用して相互に参観や協議することができたのは幸いであった。

課題研究テーマのキーワード「探究的な学び」であるが、この共同研究メンバーの実践では、年間を通じて一つの課題を設定し、それを徹底的に探究し続けるスタイルをとっているものが圧倒的に多い。また、期せずしてSDGs（持続的な開発目標）に関する学習になっているのも特色の一つである。試行錯誤しながら探究プロセスの指導法を工夫する内に、児童の21世紀型能力¹⁾（基礎力・思考力・実践力）を鍛えていることが明らかである。この成果をどのようにして和歌山で共有し合い、全国へ発信していくかが今年度の課題である。

2. 今年度の主な活動

共同研究メンバーの「生活科・総合的な学習の時間」に関連する主な活動は次の通りである。

(1) 共同研究協議会

SNSを活用して、随時、共同研究メンバーが進めている「総合的な学習の時間」の状況を交流、また、メンバーが公開授業を担当する際の情報交流を行い、可能な限り互いの授業を参観し、協議を深めるよう心がけてきた。

(2) メンバーが行った公開授業など

* 下線は授業者、下線なしは助言者。参加者は省略

6月24日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育（中山雄）

7月27日 和歌山大学教育学部附属小学校にて開催の複式授業研究会（中山和・谷尻）

10月23日 和歌山大学教育学部附属小学校にて開催の秋の教育研究発表会（中山和・谷尻）

10月27日 和歌山市立有功東小学校にて開催の教科教育研究会・総合的な学習の時間（早崎）

11月17日 和歌山市立雑賀小学校にて開催の教科教育研究会・社会科／生活科（藪・赤松）

11月30日 和歌山市立有功東小学校にて開催の和歌山市小学校生活科研究会（前田）

12月3日 和歌山市立有功東小学校にて開催の和歌山市小学校総合研究会（中山雄）

(3) その他

6月19日 日本生活科・総合的学習学会課題別研究発表（中山義）

4月～8月 和歌山大学教育学部教職新科目「総合的な学習の時間の指導法」担当（貴志・谷尻）

(4) 講演会

3月5日 石堂裕氏講演会&実践発表会を教職大学院実践支援ユニットと共催でオンラインにて開催。今年度の実践を2名が発表（藪・細田）。今回、初めて全国から参加者を募る。

3. 共同研究者実践概要

和歌山市立雑賀小学校 2年 赤松広志

単元名『もっと知りたい さいかの町～秋♪あき♪するほど秋葉山～』

本単元は、1学期に行った町探検の学習を受けて、子供達が、自分達の住む地域への愛着をさらに深めることを目的として行った。秋葉山は、校区内にある「秋葉山公園 市民の丘」の通称で、地域の人々から親しまれている自然豊かな公園である。

単元導入時、子供達に「これまでの町探検で、何回も行きたい所を見つけられたかな？」と尋ねたところ、多くの子供達から、「秋葉山！」という答えが返ってきた。そこで、秋葉山をさらに楽しむ計画を立て、何度も探検を繰り返していくと、そこでは様々な出会いがあった。まずは“秋”との出会い。どんぐりやすずき、柿の実を集めて楽しむ子供達の姿が見られた。次に“動物”との出会い。リスやトンビといった動物達を見つけて、子供達は大喜びだった。そして“人”との出会いである。秋葉山の絵を描く人、リスやトンビにエサをあげる人、林道を掃除する人……、毎日のように秋葉山を訪れているこれらの人々と出会い、一緒に活動させてもらうことができた。授業の中で一緒に活動している写真を見た子供達が「友達みたい！」と呟いたのは、子供達が地域に住む人と関わり、温かい関係を築くことができたことを象徴する一言だった。



単元終末では、自分達の見つけた秋葉山の魅力を1年生にも伝えようと、教室を秋葉山に飾り付けして招待したり、実際に一緒に秋葉山に行ってスタンプラリーをしたりして、単元全体を通して秋葉山での活動を楽しむことができた。

和歌山市立有功東小学校 2年 前田峻

単元名『六十谷の町でワクワクぼうけん！ノンノダンクが大大大すき！』

2年生の生活科の学習の中で、地域のパン屋さんとたくさん関わってもらい、学びを展開した。「ノンノダンク」というパン屋さんを取り上げたのは、店長さんが、子供たちが来ることを好意的に捉えてくれて、何度もパン屋さんの見学をさせてもらったり、パン作りを経験させてもらったりできたからである。

最初は「パンがおいしそうだった。」「食べてみたい。」「という意見が多く出ていたが、学習を進めるに連れて「パンを作ってみたいな。」「店長さんみたいに上手くできないな。」「店長さんってすごいな。」「店長さんにお礼がしたいな。」と、パン（物）から店長さん（人）へと思いが深まっていく様子が見られた。店長さんと呼んでお礼の会をした時には、お店のランチの様子やパン作りの様子を劇で再現したり、お店に飾ってもらいたいものを作成したり、店長さんやお店のすてきな所を発表したり、オリジナルのパンを考えて伝えたりと、様々な方法で感謝の思いを伝えていた。お礼の会の最後に、店長さんが子供たちに「地域のパン屋さんで勉強したことを忘れないでほしい。大きくなっても、ノンノダンクでパンを作ったことを思い出したり、買いに来たりしてくれるとうれしい。」と伝えてくれた。店長さんの言葉から、地域で学ぶことの価値や、地域と関わることの有用性を感じた。



和歌山市立有功東小学校 4年 中山雄一郎

単元名『世界一すてきな憩いの場“4風ファーム”～みんなの笑顔を増やそう～』

4年風組の総合的な学習の時間の時間の中で、昔ヤギ牧場として活用していた場所を利用した。1学期は畑を作ってJAさんからいただいた野菜を育て、2学期からはヤギ牧場を改装して福岡さんからお借りしたヤギを育てることになった。

この学習のねらいとして、一年を通して友達と思いやりをもって協力することの大切さや課題を解決する力、自分たちの取り組みを多くの人に発信する力を身に付けるために、このような単元を進めることとなった。また、畑や新しくヤギ牧場を作るために、自分たちの力だけでは達成し難い問題でも、多くの保

護者や先生方などに協力してもらうことによって、人との関わりの大切さも理解できるようにしたいと思い取り組んだ。

野菜作りをしている時には、毎日水やりをして定期的に野菜の育ち具合を確認していたが、虫に野菜の葉を食べられるという問題が起きた。しかし、農薬を使わずに防虫ネットを使用したり手作り農薬をまいたり害虫を寄せ付けないためにコンパニオンプランツという方法を用いたり自分たちでできる対策方法を取り入れて無事立派な野菜を育てることができた。

また、ヤギを飼育する際には、ヤギ牧場をきれいにそうじしたりヤギ小屋を建てたりと友達や福岡さんと協力して立派なヤギ牧場を作ることができた。最初は3頭のヤギをお借りしたが、1頭はすぐに福岡さんのもとへ帰ったため2頭のヤギをクラスで協力して大切に育てた。保護者や地域の方々からも手厚い支援を受けて取り組んだ活動であるので、子供たち自身は多くの人に感謝の気持ちを抱きながら責任をもって活動に取り組むことができた。



和歌山市立雑賀小学校 4年 藪隆政

単元名『UKMs 4 3 ～海や川を守るスーパーマンになろう 4年3組～ エイエイオー!』

今年度は海や川など自然に関わる“人・もの・こと”を大切にしながら活動を行った。この学習のねらいは、①自分たちが住んでいる地域にはとても魅力があり、自慢できる場所であることを認識すること②海や関わっている人の思いを知ることで、自分たち自身にも思いを持って取り組んだり、何事にチャレンジできるようになったりすることであった。

最初は「自分たちの住んでいるところの自慢は？」と教師から投げかけをした。しかし、ほとんどの子が「自然」と答えたが、何か具体的に答えることができなかった。そこで、1学期は「和歌浦の海を好きになろう!」をテーマにして遊覧船、地引網などを体験したり、とれたてのしらすを食べさせてもらったりした。また、しらす漁師の横田さんの思いについても深く知ることができて、子供たちは海を自慢できる場所だと思えるようになってきた。2学期も、県の学習環境アドバイザーの平井先生や県立自然博物館の國島さんにも関わっていただき、海の生き物について学ぶことができた。

同時に、ごみがたくさんあることにも気づき、加太にある友ヶ島のごみ調査を行った。そこで、自分たちで解決できない量のごみがあり、解決できないと思う子がほとんどであった。しかし、「こんなに好きになった海だし、色々な人が自然と関わって一生懸命仕事をしているんだから、自分たちが力にならないと。」「こんな素敵なおとこを色々な人にもそうだし、自分たちが大人になった時に子供にも見せたい!」と、自分の地域に愛着を持つようになってきた。

その後は、地域の人や雑賀小学校の子に声をかけて、ゴミ拾いを行い、難しいことにもチャレンジしていく大切さも学んだように感じる。



和歌山市立楠見小学校 5年 山崎亮子・谷口聖人

単元名『楠見ポテトチップスプロジェクト』

5年生の総合的な学習の時間で、野菜を育て販売する活動を行った。その栽培や、利用・販売方法を考える中で、子供たち自身が自分たちの学習に計画立てて考え、主体的・協同的に学ぶことができるようになることがねらいである。

最初は「来年、高額な修学旅行の費用を家族に出してもらえるだろうか」というところから始め、自分たちで商売をしようと投げかけた。そこで、1学期は、学校で畑づくりに向きそうな土地を探し、土壌のpHなどを考えながら自分たちで耕した。そして、自分たちで選んだ野菜を育て、手作りの無人販売所をつくって販売した。その販売活動の中で、地域の人たちと交流することができた。



2学期は、社会科で6次産業という言葉に出会い、自分たちも挑戦することになった。一学期はグループごとに違った栽培する野菜をじゃがいもに統一し、意見交換をしながら育てた。そのじゃがいもで、生産から加工（ポテトチップス）、販売をすべて手掛ける、6次産業に取り組んだ。生産の過程で、じゃがいも農家の方、カルビー北海道工場、栄養士の方々に会うことができた。約百種類のポテトチップスのパッケージ研究、揚げる温度・味付けなどを変えた数十種類の試作品の製作などを経て、「くすポテ」の制作をした。このように商品化という活動を通して、食文化や経済の仕組みなどを学ぶことができた。

和歌山大学教育学部附属小学校 56年複式学級 中山和幸
 単元名『わたしたちのくらしとSDGs』

6月、和歌山市役所の方から、和歌山市加太地区にある無人島である友ヶ島は、観光スポットとして人気が高まってきている一方で「大量のごみが漂着することが大きな課題となっていること」を聞いた。これを問題だと捉えた子どもたちは、県の環境アドバイザーの方や加太の漁師の方にオンラインでインタビューを行い、友ヶ島の漂着ごみが及ぼす影響や原因について調査した。調査の結果、島の北側に漂着するごみは、プラスチックが多いことや大阪湾周辺の街から出たごみが潮の流れに乗って、漂着していることを知る。また、島の南側には中国や韓国から出たと思われる外国のごみも漂着していることを知った。さらに、漂着ごみの8割は自分たちの普段の生活の中から海にあふれ出したごみであることも突き止めた。

そこで、各自で行うことができる持続可能な取り組みを「マイチャレンジ」として、夏休み中に一人一人が行うことを決め、海岸・河岸クリーン活動を進めたり、3R活動でプラスチックごみが出ないように工夫して生活したりした。そして、友ヶ島のごみ問題はたくさんの地域から出たごみが流れ着いているという性格上、自分たちだけでマイチャレンジを続けていても問題は解決しないのではないかと考えるようになり、友ヶ島の問題や問題解決のために自分たちができることなどをまとめた動画を作成したり、SDGsのシンポジウムに参加したりすることで啓発運動を行ったりした。



和歌山市立加太小学校 6年 中山義之
 単元名『加太海プロジェクト』

今年度の取組は「多様な他者との連携」を意識した。1学期、和歌山市役所企画課職員の方からSDGsについて学び、市内の3学級が企画課とそれぞれ「SDGs推進に関する約束」を結び、ゆるやかなネットワークを築いた。こうした中で、本校は校区に広がる海をベースに加太海プロジェクトの活動を始めた。加太海プロジェクトでは、海藻を教材に活動を進めた。具体的な活動は、(1)「紀の国わかやま文化祭2021」加太会場の主催者と連携し、寒天提供を目指し漁師さんからいただいたテングサを干し、寒天づくりをする活動 (2)テングサやヒジキ等の海藻が加太周辺のどのような場所に生えているのかの観察、そのような海藻をいつどのような道具を使って採っているのか等を漁師さんから聞き取る学習(写真)、情報収集する中で知った(修学旅行で訪れる)和歌山県串本海域のヒジキの不漁について、水産試験場の方から考えられる原因を教えてもらい、和歌山県環境アドバ



イザーの方から海洋環境の変化について学ぶ学習 (3)修学旅行で串本を訪れ、串本海域について海中公園職員の方から話を聞き深める学習 (4)企画課との「約束」に基づき、アマモの種を発芽させ植え付ける活動等である。

これらの活動を通して、子どもたちは、海の環境が確実に変化していてそれが生態系に影響していること、また、それらは「関係のないこと」、「どうしようもないこと」ではなく、適度に人が手を加えて自然環境を守っていく必要性を学んだ。

和歌山市立有功東小学校 6年 早崎大輔

単元名『6風プロジェクト～世界一すてきな小学校をめざして～』

6年生の総合的な学習の時間で、自分の学校をテーマに学習を行った。学習のねらいは、『学校のみんなや、地域の人々と協働しながら学校をより良くするための活動を通して、学校を大切に思いながら生活することの良さを理解し、学校の発展を願って自分にできることを考え、すすんで活動に取り組む自分自身の良さに気付きながら学校づくりに関わろうとする。』とした。

“世界一素敵な小学校を一緒に作っていこうね”これは、有功東小学校の合言葉である。6年生になった子供達は、「学校のリーダーとしてがんばりたい。」等と4月当初の作文に書き、この願いを出発点に総合的な学習の時間をスタートした。「学校が世界一だと思いませんか？」等と尋ねる全校アンケートを実施し、結果の分析を経て「みんながもっと学校が楽しいと思うには、どんな活動をすればよいか？」という課題を設定した。子供達は、必要だと思う活動を考え、各作戦チームに分かれて活動した。また、学校南側に広がる斜面の整備・活用にも取り組み、地域の人や学校のみんなの思いや願いをもとに活動した。学校の南斜面は、昔、児童や教職員、地域の方が茶畑や果樹園にしようとして整備されていた場所である。それらの人々との関わりを通して、再び良い場所にしたいという意欲を高めていた。荒れた場所を果樹園に復活させるために、児童の活動は続いていく。子供達は、このような体験活動を通して「自分の学校」に対する考えを形成していった。



和歌山市立雑賀小学校 6年 細田和希

単元名『動物たちの力で地域に笑顔とぬくもりを！

～“小さくて大きな”動物園の運営を通して～』

今年度の総合的な学習の時間はやはり「総合を通してどんなことがしたい？」と尋ねるところから始めた。子どもたちからは「みんなが笑顔になることがしたい！」という意見が多く出た。その背景には一年以上続くコロナ禍の影響があり、活気がなく、どこか暗い社会の雰囲気子どもたちなりに敏感に感じているようだった。この目的を達成するために何ができるかを考え、子どもたち自身の関心も高かったことから動物園を開くことになった。

学習が始まると、まず動物園を通じて多くの人を笑顔にするために何が必要か考えた。ただ飼育して見てもらうだけではおもしろくない。お客さんがより見やすくするにはどうすればいいか全国の動物園のようすを参考に、環境整備グループが一から自分たちで飼育小屋を建てた。情報発信グループはSNSを通じて様々な情報発信を行い、飼育グループは平日も休日も関係なく動物たちと深く関わり関係を築く。来園してくれた方により楽しんでもらうため、グッズ制作グループが動物をモチーフにしたグッズを作成したり、イベント企画係が様々なワークショップを計画したりした。このようにグループごとに分かれて動物園運営を行っている。

また、アドベンチャーワールドや和歌山城公園動物園に見学に行き、お話を聞かせていただくことを通して、動物との適切な関わり方や動物園がもつ役割について考え、人と動物が共生する未来の在り方などに目を向けた。



5. 講演会

3月5日(土)、恒例の石堂裕氏講演会&実践発表会を昨年度に引き続きオンラインで開催する。オンラインということで他地域からの参加も容易であるため、これを契機に全国へ発信しようと企画し、日本生活科・総合的学習学会や複数の出版社のサイトで研究会情報として掲載して頂くことが出来た。その結果、1月段階から和歌山に限らず全国からの申し込みが相次いだ。

第1部は、今年度の総合的な学習の時間の実践発表で、2名の発表者は一人20分という限られた時間であるが、写真などを活用して一年間の学びの軌跡を具体的に紹介する。発表者とテーマは以下の通りである。いずれも探究的な学びのお手本ともいえる実践で、児童と教員が話し合いと試行錯誤を重ねながらテーマを徹底的に追究しているものである。

①「UKMs43 ～海や川を守るスーパーマンになろう！ 4年3組～ エイエイオー！」

(和歌山市立雑賀小学校4年 藪隆政教諭)

②「子どもが主体となって活動する街中の里山づくり」

(和歌山市立雑賀小学校6年 細田和希教諭)

第2部は、過去三年間に続き、石堂裕先生(兵庫県たつの市立新宮小学校主幹教諭)による講演である。毎年、時代のニーズに沿ったテーマでお話していただいているが、今年度は学校現場が、今、最も注目しているGIGAスクール構想に焦点をあて、「総合的な学習の時間とGIGAスクール、おさえておきたいポイントとは」と題するご講演をいただくこととなっている。

6. 成果

昨年度の報告書⁴⁾では次のように結んでいた。

今後も、「授業を広く公開し、批判的に学び合うこと」「全国の優れた実践にふれること」「和歌山市・和歌山県全域へ、学び実践したことを発信する」を念頭に置き、各自の意識を更に一段高め、この共同研究が和歌山の総合的な学習の時間の実践を全国に発信していく拠点になればと考えている。

この実現に向けて大きく一歩を踏み出したのが、今年度の大きな成果と言える。具体的に三点について述べる。一つ目は、草創期からのメンバーである中山義之教諭が「学会で発表する」と強い意志をもって臨み、日本生活科・総合的学習学会での発表を実現させたことである。課題別研究発表という小さなステージではあるが、これに前後してすでに実践を二度にわたって論文にまとめていることも特筆すべきことである。^{2) 3)}

二つ目は、恒例の石堂裕氏&実践発表会を全国に公開したことである。これはコロナ禍であることを逆手に取り、オンライン開催という参加法も助けとなったことが大きい。上記の通り、学会や教科書出版社のサイトでも紹介され、和歌山の優れた実践を全国の教員らに伝えることが出来た。今後、これらを狙上に載せ厳しくご批評いただければありがたい。

三つ目は、この四年間の学びをいかし、貴志年秀特任教授と谷尻が、和歌山大学教育学部教職新科目である「総合的な学習の時間の指導法」に中心的に関わることができたことである。学部必修の科目であるため、卒業生が現場に出た際にこの講義で学んだ内容をおおいにいかしてくれることと期待している。講義の内容についても今後さらに改善を繰り返し、より効果のある指導法を創り上げていきたい。⁵⁾

関連文献

- 1) 国立教育政策研究所(2013)、社会の変化に対応する 資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則〔改訂版〕、教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5
- 2) 中山義之・谷尻治(2021)、海を題材とした探究的な学習の一考察 ―「元気☆海洋環境プロジェクト」の事例から、和歌山大学教育学部紀要第71集。
- 3) 中山義之・谷尻治(2022)、小規模小学校に求められる総合的な学習の時間の一考察―映画制作プロジェクトを手がかりとして―、和歌山大学教育学部紀要第72集
- 4) 谷尻治・貴志年秀・林真希・中山和幸他(2021)、3つの「学びをつなぐ」授業づくり～主体的・対話的で深い学びに向かうために～、2020年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 pp.133-137.
- 5) 谷尻治・貴志年秀・梶村麻紀子・古賀庸憲(2022)、教職新科目「総合的な学習の時間の指導法」―成果と課題―、和歌山大学教職大学院紀要 No.6